『シロイサクラ』　作：岩本憲嗣

■登場人物

松宮美緒（まつみやみお・♀・２９歳）

梶本聖（かじもとひじり・♂・１９歳）

岩浪真（いわなみまこと・♂・１７歳）

佐東佳菜子（さとうかなこ・♀・２９歳）

百瀬健太（ももせけんた・♂・２８歳）

後輩女性

○美緒の職場

キーボードのタイピングの音が鳴り響いている。

美緒　「よし終わりっと。やっと帰れ……」

　　後輩女性が近づいてきて声をかける。

後輩　「松宮さんお疲れ様です」

美緒　「え？あ、あぁ……はい」

後輩　「仕事ってもう終わりました？」

美緒　「えぇまぁ……何か他にやることありました？」

後輩　「ごめんなさい。そういうことじゃなくて。松宮さんって今

夜って予定とかあります？実は、派遣の子たち集めて合コン

があったんですけど、一人風邪で来られなくなっちゃって、

困ってるんです。それで是非代わりお願い出来ないかなって」

美緒　「私が？」

後輩　「はい。だってほら、これまで私たち松宮さんとあまりお話

ししたこともなかったし、親睦を深める意味も込めて……み

たいな。ね、行きましょう」

美緒　「あ……えと……ごめんなさい。先約があるんです」

後輩　「マジですか？そうか……まぁ、今日金曜ですもんね。わか

りました」

　　立ち去って行く後輩。後輩の声が段々小さくなっていく。

後輩　「嘘でしょ、絶対暇そうだと思ったのに。マジどうしよう」

美緒Ｍ「嘘……そう、私は嘘をついた。実際のところ約束なんて何

一つない。ただ嫌だったのだ。彼女たちの求める＜代わり＞

になんて私は到底なれやしない。年齢だって趣味だって何も

かもが全然違う。そんな無駄な時間、私は過ごしたいなんて

思わない」

ＰＣの電源を落とし、コートを羽織り帰宅の準備をする美緒。

そこに美緒の携帯が鳴る。

美緒　「え？……佳菜子から？」

○居酒屋・店内

喧騒が辺りを包んでいる。

佳菜子「はいはい！じゃぁお久しぶりってワケでカンパーイ！！」

　　佳菜子、美緒、百瀬が乾杯。

美緒　「つい先週呑んだばっかりじゃない」

佳菜子「細かいことは気にしない気にしない、ねぇ？」

百瀬　「え、えぇ。先輩たち今でも仲いいんですね」

佳菜子「美緒の友達なんてあたしくらいよ。ははははは」

美緒　「遅れてきてみればすっかり出来上がってるんだから……と

ころで佳菜子、今日のこれは一体何の会？なんで百瀬君まで

いるの？」

百瀬　「それはその……」

佳菜子「可愛い大学の後輩の相談に乗ってあげてたの」

美緒　「相談？」

百瀬　「いや、別にその。やめましょうよ佐東先輩」

佳菜子「聴こえなーい。ねぇねぇ美緒、アンタ最近浮いた話とかな

いワケ？」

美緒　「何よ突然」

佳菜子「いいからさ」

美緒　「金曜夜に呼びつけられてすぐ来てるんですど」

佳菜子「ですよねー。はいはい察したよ。そもそも美緒に男とか想

像出来なさすぎ。昔っから男を寄せ付けないオーラが出てる

もの。ねぇ百瀬君」

百瀬　「何で俺に振るんですか！？」

美緒　「オーラ……出てる？」

百瀬　「そ、そんなことは……むしろとても綺麗というか……魅力

的です」

美緒　「そういうのいいって。戸村さんが聞いたらきっとヤキモチ

焼くよ」

佳菜子「出た！地雷ドカン！！」

美緒　「煩いな。何なの一体？もう佳菜子のことは放っておこう。

それより百瀬君、戸村さんと付き合って随分経つよね。そろ

そろ結婚とかしないワケ？」

百瀬　「あぁ……それなんですがその……」

佳菜子「酷いっ！この鬼！悪魔！その傷を癒すためにアルコール消

毒してるってのに！」

美緒　「は？」

佳菜子「は？じゃないわよ、察して察して、ほら」

美緒　「……もしかして……」

百瀬　「ははは。長すぎた春ってやつですかね。実はフラれちゃっ

たんです。つい先月」

美緒　「あ……そ、そうなんだ……なんかごめん」

佳菜子「そこでですよ！この私がキューピッドになってあげようっ

てことからのこの呑み会なワケ。面倒なの嫌いだからズバっ

と単刀直入しちゃうわよ。美緒！アンタ百瀬君と付き合っち

ゃえ！」

美緒　「はぁ！？」

百瀬　「あぁぁ！！す、スミマセン！俺が悪いんです！俺が昔、松

宮先輩のこと好きだったって話をしちゃったからその……」

佳菜子「確か美緒も蟹座だったよね。えぇと、スマホの占いにより

ますと今日は奇跡的な出逢いが期待出来る一日だって。凄くない？良かったじゃん！ほら奇跡なう！」

美緒　「勝手に話進めないでよ」

百瀬　「そ、そうですよ。松宮先輩だって困って……」

佳菜子「大丈夫大丈夫、面倒見のいい美緒なら十分に戸村さんの代

わりになってくれるから」

美緒　「佳菜子……」

佳菜子「ねぇ美緒？」

　　突然席を立つ美緒。

佳菜子「ビックリした！」

百瀬　「スミマセン！」

美緒　「ううん、謝るのはこっちだよ。ごめんね百瀬君。私じゃ戸

村さんの代わりにはなれないよ。ほら、オバさんだしね」

佳菜子「帰っちゃうの？ねぇ、ひょっとして怒った？怒った？」

美緒　「怒った。だから今日は佳菜子の奢りね」

佳菜子「じゃぁさ怒らせついでにもう一つ言ってもいいよね？いつまで引きずるつもりなの？」

美緒　「は？」

佳菜子「昔話してくれたよね。高校の時のカレだっけ？ずっと忘れ

られないってさ。ねぇ、いつまでその人のこと引きずってる

ワケ？もう１０年以上も前の話でしょ？」

美緒　「違うよ、１２年前。じゃぁ私帰るから」

　　美緒、その場を立ち去る。

○電車内

電車の走行音が響いている。

美緒Ｍ「別に引きずってなんかいない。ただ……あの時の感覚を恋と言うのならば、私はその感覚を失ってしまっているだけなんだ。突然終わった恋。だけどいつかその続きが始まるんじゃないかなんて、そんな馬鹿げた想像を捨てきれずにいる。ただそれだけなんだ。……って……三十路前だってのに私は何考えてるんだろう。そもそも佳菜子だって私のこと心配してくれているから……まぁやり方は無茶苦茶ではあるけれど……でも心配してくれている。それくらい分かっている。なのに私ときたら……」

美緒　「え？駅通り過ぎ……しまった……これ止まらないやつだ」

　電車の扉の開く音。降車する乗客たち。

美緒Ｍ「あんなことばかり考えていたからなのか。電車に乗り間違

えてしまった私が連れてこられた駅。そこは奇しくも通って

いた高校のある駅。そう、彼との思い出がつまったその駅だ

った」

美緒　「懐かしい……随分来てなかったな。終電まで……まだ大丈

夫だよね」

　　美緒、改札を出る。

美緒Ｍ「何が私をそうさせたのだろう。ムシャクシャしてたから？

それとも……呼ばれたようなそんな気がしたから？気が付け

ば私は駅の外に立っていた。そう、あの時の思い出をなぞる

ように、このかつて見知っていた街に歩を進め始めていた」

○駅から少し離れた住宅街

一人歩く美緒の足音だけが鳴り響く。

美緒Ｍ「駅から少し離れた住宅街。坂ばかりの街並み。坂を上った

先、およそ山の上とも言っても過言ではないその頂きには街

のシンボルともいえる大きな病院。そしてさらに上をを見上

げるとそこには……」

美緒　「星……そうか、東京でもこれくらい西だと結構綺麗に見え

るんだ」

美緒Ｍ「視線をふと前方に戻す。私は視界に入ったその場所に驚き、

ハッと息を飲む。そう、それは私にとっては星空なんかより

もずっとずっと美しいものに映っていた」

美緒　「あの公園……まだあるんだ」

美緒Ｍ「曲がり角の公園。そう、彼の好きだった場所。いつも二人

で過ごした場所。沢山の思い出の詰まった場所。あの時の思

い出がたちまちの内に溢れ出るのを、私は抑えることができ

なかった」

美緒　「真君……」

○公園近くの通り（回想）

二人で歩く真と美緒。静かな住宅街に響く二人の足音。

美緒　「ううう寒いね」

真　　「そりゃ冬だし」

美緒　「そんな中散々待ったんですけど」

真　　「だよな。悪りぃ悪りぃ」

美緒　 「謝罪に誠意を感じません。本当に悪いと思ってるなら……」

真　　「あの桜の絵を寄越せ」

美緒　「分かっちゃった？」

真　　「単純だもん、お前。でもいくら頼まれても無理」

美緒　「真君のあの絵大好きなんだけどな。……それにさ、サクラ

サクって合格祈願も込めて……ダメ？」

真　　「ダメ。そもそもお前は絵なくても大丈夫だよ。頭いいし元

気だし。それにさ……ごめん、ちょっとアレだけはやっぱ無

理なんだ」

美緒　「そうか。でも今日なんであんな遅かったの？先生に捕まっ

てたとか？」

真　　「それ。マジ面倒だよな」

美緒　「進路調査票ちゃんと出さないからだよ。真君は美大行くん

だよね」

真　　「どうして？」

美緒　「前から言ってたでしょ。ねぇどこにするの？出来れば地方

はやめてよね。なかなか会えなくなっちゃうし」

真　　「大学とかさ、そんな先の話まだよく分からないって」

美緒　「先じゃないよ。私たちもう高２だよ」

真　　「でも俺は今が大切なの。美緒とこうしている今がずっと」

美緒　「ちょ、な、なに恥ずかしいこと言ってるワケ！？」

真　　「そうか？なぁ、それより腹減らない？」

美緒　「まぁ、少し」

真　　「じゃぁラーメン食べに行こうぜ。待たせた詫びに奢ってや

るよ。美味い店があるんだ。美緒もきっと好きだって。そこ

の公園曲がったところなんだ」

美緒　「え？待って！」

　駆けだす真。

○現在・公園近くの通り

一人歩く美緒。

美緒　「あの時食べたラーメン……美味しかったな。今でもあるの

かな、あのお店」

　　速足になる美緒。

美緒Ｍ「あの時の味が恋しくなって私は少し足早になる。そう、そ

この公園を曲がって……そう考えながら公園に差し掛かった、

その時だった」

美緒の歩が止まる。

美緒　「え？……ま、真……君？」

美緒Ｍ「思わず彼の名前が口から零れだす。そう……公園のベンチ

に腰掛けた人影。その姿はまさしくあの時の彼だった」

人影に近寄る美緒。

美緒Ｍ「きっと幻を見ているだけだ……そう思いながらも私は自分

の歩を止めることが出来なかった。一歩一歩、ベンチの彼に

近づく。こちらの気配に気づいたのか彼が立ち上がる。私は

緊張の体が強張り動けなくなる」

歩が止まる美緒。

美緒Ｍ「そして彼が……こちらを振り返る」

聖　　「あ……すみません、別に怪しいものじゃ……」

美緒　「嘘……」

美緒Ｍ「その困ったような笑顔……それはまさに私が誰よりも愛し

た笑顔と瓜二つだった。目も鼻も口も耳も眉も全てが一致し

た。違う点があるとすれば、目の前にいる彼の方が少し大人

びている点と……」

聖　　「あの……もしもし？」

美緒　「声が違う」

聖　　「え？」

美緒　「あ……その、何でもないです」

聖　　「ごめんなさい。夜中の公園でボーッとしてたら変質者か何

かだと思われちゃいますよね。でも僕違うんです。ちょっと

スケッチに来てただけで」

美緒　「スケッチ？」

聖　　「はい。でもこの公園って電灯とかないんですね。無理でし

た。ははははは。あの、お姉さんは？さっき声がどうこうっ

て……」

美緒　「ごめんなさい。知人によく似てたから……」

聖　　「そう……なんですね。本当ごめんなさい、疑われるような

ことしちゃって。じゃぁ僕、もう帰りますから……」

美緒　「待って！！」

　　駆けだす聖。しかしすぐに歩を止める。

聖　　「……はい？」

美緒　「好き……ですか？」

聖　　「え？」

美緒　「ラーメン……好きですか？」

聖　　「……はい」

○ラーメン屋・店内

ラーメンを啜る音。美緒、息を吹きかけてラーメンを冷ます。

聖　　「へぇ」

美緒　「な……何？」

聖　　「女の人がラーメン食べてるとこ初めて見ました」

美緒　「は？」

聖　　「あとこんな美味しいラーメンも初めてです。そもそもラー

メン屋さんって入るの初めてかも」

美緒　「そう……なんだ。ねぇ君……学生さん？」

聖　　「はい」

美緒　「いくつ？」

聖　　「１９です」

美緒　「（ボソっと）だよね、２９じゃないよね」

　　美緒、再びラーメンを冷まし始める。

聖　　「猫舌なんですか？」

美緒　「うん。ごめんね食べるの遅くて」

聖　　「いいです。その間ずっと見てますから」

美緒　「え！？……や、やめてよ」

美緒Ｍ「この子は一体何を言っているんだ。そんな、ずっと見てる

だなんて、私は恥ずかしさにも似た妙な感情で気が動転して

しまった。そして、一刻も早くこのラーメンをたいらげてし

まわなければと思い、無理をしてスープに口をつける……」

　美緒、慌てて食べようと食器をガチャガチャする。

美緒　「あちっ！」

美緒Ｍ「熱さのあまりスープをこぼしてしまう。恥ずかしい、こん

な姿も隣にいる彼にじっと見られてしまったのか……そう後

悔しながら、必死になって卓上の紙ナプキンを探す」

聖　　「服、汚れてないですか」

美緒Ｍ「私の視線の先にそっと差し出されるハンカチ」

聖　　「大丈夫ですか？口、汚れてますよ」

美緒Ｍ「そう言うとハンカチで私の口元を拭う彼」

美緒　「あ、有難う。は、ははははは、ごめん、なんか格好悪いね、

年上なのにこんな……」

聖　　「年とか関係ないですよ。僕が慌てさせちゃったのが悪いん

ですし」

美緒　「う……うん。有難う」

美緒Ｍ「真君に瓜二つの彼は、また困ったような笑顔を浮かべてみ

せる。私は彼に拭われた口元をそっとなぞる」

聖　　「あの……食べながらでいいんで、一つ聞いてもらっていい

ですか。大切な話なんです」

美緒　「え？な、何？急にどうしたの？」

聖　　「その……もっと早く言うべきだったんですけど、僕……」

美緒　「う、うん……」

聖　　「実は……今お金持ってません」

美緒　「は？……なんだそんなこと。別にいいって。誘ったの私だ

し。私が払……」

聖　　「ダメです。それじゃ何ていうか……援交みたいじゃないで

すか」

美緒　「ど、どどどういうこと？」

聖　　「だって、お金払わせちゃって、それでデートみたいにって

いうか」

美緒　「あのね、別に私デートなんて……」

聖　　「とにかくラーメンのお金は絶対払います。だから……また

あの公園に来て貰えませんか」

美緒　「え？」

聖　　「その、家近いんですけど、家にも多分今はお金ないってい

うか……だからその……また来てほしいんです」

美緒　「あの公園に？」

聖　　「はい！……って、図々しいですよねなんか」

美緒　「ううん、そんなことない。わかった、また来る」

聖　　「本当ですか！？」

美緒　「だってお金貰わないと私が援交させたことになっちゃうん

でしょ」

聖　　「はい。……そうだ、そしたら連絡先を……電話番号と……

あの、ＳＮＳとかやってます？」

美緒　「まぁ、一応」

聖　　「じゃぁＩＤ教えますね」

　　紙ナプキンにＩＤを書きはじめる聖。

美緒　「Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｉ……」

聖　　「ひじりです。僕、梶本聖って言います。あの……えと、…

…お姉さんは……」

美緒　「わ、私？……松宮……松宮美緒」

聖　　「美緒……さん……いい名前ですね」

美緒　「私の名前を繰り返す彼の表情は今日一番の笑顔だった……

気がした。ううん、少なくとも私の目にはそう映った。真君

とそっくりのその笑顔を見て私は……」

○翌日・美緒の自宅

一人黙々とＰＣを操作する美緒

美緒Ｍ「パソコンを開き、ＳＮＳで彼のＩＤを検索したのは翌朝の

ことだった。帰ってすぐには出来なかった。だって……怖か

ったから。ひょっとしたらこれは全て幻だったんじゃないか。

私が真君を思うあまりに生み出した虚構だったんじゃないか

なんて、そんな不安が拭いきれなくて」

い。だから彼は幻なんかじゃない。本当に……」

　　ＥＮＴＥＲキーを押す美緒。

美緒　「……いた」

美緒Ｍ「そこには昨日見たのと同じ、少し困ったような笑顔を浮か

べた聖君の写真。それと沢山の美しい風景の写真」

美緒　「写真好きなのかな？」

美緒Ｍ「プロフィール欄を詳しくみて、彼が好きなのは写真ではな

く風景なんだと分かった。そこにはこう書いてあった」

美緒　「梶本聖……１９歳。都内の美大に通っています……美大」

美緒Ｍ「驚いた。まさかそんなところまで真君にそっくりだなんて。

しかも専攻は水彩。それも風景画が得意だと書いてある」

美緒　「同じ……同じだ。真君と……あれ？そういえば昨日も言っ

ていた。スケッチしに来たって……でも……なんであの公園

なんかでスケッチを？」

○翌日・公園

　　ベンチに腰掛けている美緒と聖

聖　　「なんでって……桜の樹を描きたかったです」

美緒Ｍ「ＳＮＳを見た後で私はすぐに連絡をとった。そしてその翌

日、私はさっそく彼に会いに行った。そう、約束したこの公

園まで」

聖　　「この公園の桜……綺麗だなって思いません？」

美緒　「でも今、冬だよ。花咲いてないし」

聖　　「はい。ですから咲いたらもっと綺麗なんですよ」

美緒　「うん。知ってる。凄く綺麗なんだよ」

美緒Ｍ「そう、この公園の桜の樹は私にとっても特別だった。だっ

て真君が絵に描いていたから。そして、私はその絵が大好き

だったから。いくら欲しいとねだっても決してくれはしなか

ったけれど」

聖　　「あの……美緒さんのＳＮＳ見ました」

美緒　「あぁ……うん、有難う」

聖　　「何も書いてないんですね」

美緒　「いきなりそれ？」

聖　　「別に悪いって言ってるわけじゃなくて」

美緒　「……まぁ事実だし。ごめんね、読んでも面白くなくて。

でも書くことも特になくて」

聖　　「じゃぁその……つくりましょうよ！」

美緒　「つくる？」

聖　　「はい！書くこと、これから増やしに行きませんか？」

美緒　「そんな、増やすって急に言ったって……どうやって」

聖　　「僕と一緒に」

美緒　「聖君と？」

聖　　「はい！その、任せて下さい。多分大丈夫ですよ。この街だ

って駅前まで行けば結構色々あるんです。デパートとかもあ

ります。美味しいお店も多分あると思いますし、遊べる場所

だってきっと」

美緒　「詳しいの？」

聖　　「少しは。昔、色々話聞かせてもらったし」

美緒　「聞かせてもらった？」

聖　　「いや、それは……とにかく、色々あると思います。そした

ら色々書くことだって見つかるっていうか……」

美緒　「うん。そうだね。聖君の言う通りかも。私知ってるから。

色々……ううん、全部あるって、この街には全部」

　　スマホのカメラのシャッター音が何度もする。

美緒Ｍ「彼に促されるままに私たちは駅前までやってきた。そして

二人で色んなものを見て回った。デパートでウインドウショ

ッピングをした。二人してファーストフードを食べた。ゲー

ムセンターでクレーンゲームもした。それに大きな本屋さん

で立ち読みだってして。まるで高校生みたいな……ううん、

高校生。完全に高校生のデートそのもの。だって、行くとこ

ろ全部が……」

○公園

　　ベンチに腰掛けている美緒と聖

美緒　「結局この公園に戻ってきちゃったね」

聖　　「あの……どうでしたか？ＳＮＳに書くこと……増えました

か？」

美緒　「うん。増えた。だって……楽しかったから」

聖　　「本当ですか？」

美緒　「なんかね、すごく懐かしい気持ちになれた」

聖　　「え？」

美緒　「この街案外変わってなくて……私が高校生の時と」

聖　　「はい」

美緒　「それに聖君が連れてってくれるところがね……」

　　涙ぐむ美緒。

聖　　「美緒さん？」

美緒　「ううん、なんでもない。聖君がつれてってくれるところが

さ、まるっきりあの時と一緒っていうかね……」

聖　　「あの時ってどの時ですか」

美緒　「ごめんね、こっちの話。そうだ、ラーメン代まだ貰ってな

かったね。このままじゃ援交のままだよ」

聖　　「……ですね。待って下さい」

　　聖、財布を開き千円札を取り出す。

聖　　「……はい」

美緒　「千円札？おつり……３５０円だよね。参ったな、細かいの

あったかな」

　　美緒、財布を取り出し小銭をまさぐる。

美緒　「ごめん、ないや。ちょっと待ってて、ジュース買って崩し

てくるから」

聖　　「おつりいいです」

美緒　「え？」

聖　　「おつり……いらないです」

美緒　「でも……」

聖　　「そうじゃなくって、今はいらないって意味です。今度……

また今度返して下さい。だってほら、そうじゃないと、今度

は僕が援交してるみたいだし」

美緒　「何それ……」

聖　　「ダメですか！美緒さん……」

美緒　「ダメ……なんかじゃない。分かった。じゃぁおつりは今度

返すね」

聖　　「はい！絶対……約束ですよ」

　　聖が駆け去る。

美緒　「（微笑みながら）３５０円の援交って……どれだけ安いわけ

よ、私」

美緒Ｍ「これが始まり。そう、こうして私たちは週末ごとにこの公

園で待ち合わせをするようになった。会う度に駅前に出て高

校生みたいなデートをして。いつもいつも同じことの繰り返

し。だけどそれは私にとっていつしか日常となっていた。か

けがえのない、一番大切な日常に」

○居酒屋・店内

喧騒が辺りを包んでいる。

佳菜子「はいはいはい！じゃぁいきますよ！メリー……クリスマス

っ！！」

　　乾杯をする佳菜子と美緒。

美緒　「クリスマスまでまだ二週間もあるよ」

佳菜子「細かいことは気にしない。じゃぁほら、女二人の忘年会っ

てことでいいからさ」

美緒　「今日は一人なんだ」

佳菜子「なに？この前のことまだ根に持ってるわけ？」

美緒　「何その言い方。佳菜子の図々しさも大概だよね」

佳菜子「よく言われる。サンキュ」

美緒　「褒めてないからね」

佳菜子「でも久しぶりに私と呑みたかったでしょ？」

美緒　「別に」

佳菜子「酷い！私は美緒と呑みたかったのに！！」

美緒　「ってことは何かあったの？」

佳菜子「ご名答、聞きたい？」

美緒　「聞きたくない」

佳菜子「と言いつつ本当は親友の相談に乗りたくてウズウズしてる

んでしょ」

美緒　「はいはい、もうそれでいいから。どうしたの？」

佳菜子「百瀬君の話でちょっとね。っていうかそもそも美緒のせい

なんだからね！」

美緒　「意味が分からない」

佳菜子「アンタがあんなフリかたするもんだからさ、今度はアイツ

私に色目使ってきやがったのよ」

美緒　「百瀬君が？意外」

佳菜子「そりゃ可愛い後輩だけど男として見られるかっていったら

……もう勘弁してぇっていうかさ。もう美緒と一緒。あたし

じゃ戸村ちゃんの代わりにはなれないだろっつぅさ。正反対

でしょ、私とあの子」

美緒　「まぁね。じゃぁ今日はそれをどう断るか相談に乗ってくれ

ってこと？」

佳菜子「それが違うんだな。ほらほら、耳をすましてごらんなさい

よ。聴こえるでしょ、シャンシャンシャンシャンとジングル

ベルが。そうクリスマスは二人ジングルベルを聞いて過ごす

ものなの！なのにこのままじゃ私は一人シングルベルを聞く

クリスマスを迎えることに……そうなるくらいなら妥協もや

むなしかなって思ったりさ」

美緒　「え？だって好きじゃないんでしょ百瀬君のこと」

佳菜子「でも一人で過ごす２９歳のクリスマスなんてもっと嫌。ね

ぇ！どうしたらいいと思う！？」

美緒　「え？いや……私にはちょっと……」

佳菜子「何よ何よ、友達甲斐がない女なんだから。いいですよいい

ですよ。どうせ美緒は私に内緒でいい人作ってるって知って

ますから」

美緒　「え？いやいや、ないないないない」

佳菜子「ダウト！！これが動かぬ証拠だ！！」

美緒　「これ……私のＳＮＳ？」

佳菜子「ここ一ヶ月くらいなんかやたらと楽しそうじゃない？」

美緒　「それは……これまで全然書いてなかったからいけないなと

思って」

佳菜子「そしてここ！ほら見切れてる！男が見切れているわけでござんすよ！！」

美緒　「あ」

佳菜子「あ。……じゃないわよ。もう、そういうのあるなら報告し

てよ。親友でしょ」

美緒　「いや、だから本当にそういうのじゃなくて」

佳菜子「う、うううううう。うえおうおおおううう！！」

美緒　「どうしたの？気持ち悪い？」

佳菜子「違うわよ！泣いてるんでしょ！嬉しくて嬉しくて仕方ない

のよ！！」

美緒　「え？」

佳菜子「高校時代の彼のことずーっと忘れられなくて、恋が出来な

かった美緒がさ。やっとだよ、やっとその彼の代わりになる

いい人に出逢えたってのが私は嬉しいんだよ」

美緒　「彼の代わり……」

佳菜子「そうだよ。昔の恋に代わる新しい恋。美緒やっと出来たん

だよ」

美緒　「新しい恋……真君の代わりに……聖君……」

美緒Ｍ「私は……何を今更驚いているんだろう。本当はずっと前か

ら……ううん、初めてあった時から気づいていた筈なんだ。

私が聖君と一緒にいると楽しい理由。それは……聖君の中に

彼を……真君をダブらせているからだって。そう、まるで、

突然終わってしまったあの日の続きを二人で歩んでいるみた

いな、そんな錯覚を私は楽しんでいたんだって。でもそれっ

て……そんなのって……私は……」

佳菜子「美緒？美緒ぉぉ！！」

美緒　「え？」

佳菜子「どうしたの？」

美緒　「な、なんでもない……なんでも……」

美緒Ｍ「私はまた嘘をついた。なんでもなくなんてない。ずっと目

を背けて来た現実。一度視界に入ってしまったそれは、いく

ら忘れようとしたって決して思うようにはいかないものだっ

た。二人で過ごす時間が楽しければ楽しい程、また会えるの

が待ち遠しければ待ち遠しい程、彼のことを思えば思う程…

…これまでとは違った想いが私のなかで絶えず湧き上がり続

けて……私はやがてそれに耐えきれなくなってしまった。だ

から私は……」

○公園

　　ベンチに座る聖。そこに美緒がやってくる。

美緒Ｍ「その日も同じだった。彼は一人公園のベンチに座って、に

こやかに桜の樹を眺めながら、私を待っていてくれて……」

聖　　「美緒さん。どうしたの、遅かったね」

美緒　「ごめんね。電車が……遅れてた」

聖　　「そうなんだ。ねぇ……ひょっとして何かあった？目元真っ

赤だよ」

美緒　「二日酔いのせいかな」

聖　　「そんなに飲んだの？ダメだよ飲みすぎたら」

美緒　「ごめん」

聖　　「でも少し羨ましいかも。僕も美緒さんと一緒にお酒飲んで

みたいな」

美緒　「……ダメだよ」

聖　　「怖い顔しないでよ。冗談だよ。一応１９だしね。お酒は来

年になってから。その代わり誕生日になったらどこかに飲み

に行こうよ」

美緒　「だからそれもダメ」

聖　　「なんで？だって来年にはハタチだよ」

美緒　「来年はね……ないんだよ私たち」

　　泣き出す美緒。

聖　　「美緒……さん……ごめん、僕何か美緒さんを怒らせちゃっ

た？それとも困らせた？教えて、そしたら僕……」

美緒　「それがダメなの。ねぇ何で？何で聖君は私なんかにそんな

優しくするの」

聖　　「だってそれは……」

美緒　「それもだよ。その困る仕草。なんで似てるの？目も鼻も口

も耳も眉も……声以外全部似てる。だからね……だから私、

甘えてたんだよ。１０歳も年下の聖君に。ごめん……本当に

ごめんね」

聖　　「なんで謝るの……それに年なんて関係……」

美緒　「あのね。聖君に話しておきたいことがあるの。大切な話。

聴いてくれる？」

聖　　「……聴きたくないかも」

美緒　「お願い聴いて。私の好きな人のことを話すから」

聖　　「え？」

美緒　「これは私の初恋の話。その人はね転校生だったの。私の通

っていた高校は丁度この街にあってね。彼は高１の夏にこの

街に引っ越してきたの」

聖　　「……うん」

美緒　「私も彼も美術部だった。でも私は友達に頼まれて数合わせ

で入った名前だけの美術部員。だけど彼は違ったんだ。中学

の時から色んなコンクールで沢山賞を貰ってて、その絵はね、

私みたいな素人も魅了されるっていうか……私は彼の絵が大

好きだった」

聖　　「美緒さんも絵、好きなんだね」

美緒　「うん。でも私は絵以上にそれを描いている彼を好きになっ

てしまったの。絵とは正反対にとても子供っぽくてね……聖

君と一緒」

聖　　「僕そんなに子供っぽいんだ……そうか」

美緒　「私の彼への想いはいつの間にか抑えきれなくなっていて、

気が付いたら口から思いが零れ落ちてた。好きですって……

生まれて今までたった一回だけの告白。彼……聖君みたいな

困った笑顔浮かべながら……僕もですなんて。一番嬉しかっ

た」

聖　　「付き合ったんだ」

美緒　「そう。それからの一年は本当に楽しかった。週末ごとに駅

前でデートして……でもね、それは２年生の冬に突然終わっ

てしまったの。そう、終業式の日だから丁度クリスマスだっ

た。この公園のこのベンチで二人話して……きっと明日から

楽しい冬休みになるって思ってた。でも、彼はこの街から消

えてしまった」

聖　　「……うん」

美緒　「後になって分かったのは。彼は転校しちゃったってこと。

クラスの誰にも告げないで突然いなくなっちゃったって。ど

こに行ったのか教えて欲しいって先生に必死になって訴えた

けど、本人の希望で伝えないで欲しいって」

聖　　「……うん」

美緒　「でもね、私が毎日毎日必死に食い下がるものだから、最後

には先生が折れて、これだけ教えてくれたの。彼が元々この

街に引っ越してきたのはご家族がこの街の大きな病院に長期

入院するからだって。でもその病院でも手に負えなくなって

しまって……だからもっと大きな病院のあるところに行くこ

となったんだって」

聖　　「その後美緒さんはどうしたの」

美緒　「彼を待つことにした。だって彼の家の表札はそのままだっ

たから。だから家族の病気が治ればきっとその家に戻ってく

るって思って。だけど卒業する頃になってその家の辺り一帯

取り壊されてマンションになった。私は……どうすればいい

か分からなくなった。恋の仕方も分からなくなった……一ヶ

月前までは」

聖　　「え？それって……」

美緒　「聖君に初めて会った時本当に驚いたんだから。彼に瓜二つ

な君が……彼との思い出の詰まったこの公園にいて……気が

付いたらね……私は君を好きになっていた」

聖　　「よかった。だったら……」

美緒　「でもそれは違うの。私……本当悪い女だよ。私は聖君を彼

の代わりにしてるの。私が好きなのはきっと聖君じゃなくて

……あんまりに失礼なことだよこれは。でも一緒にいるとど

うしてもそう思っちゃうから。だから私ね……サヨナラしよ

うと思って……」

聖　　「僕はそれでいいよ。失礼なんかじゃないよ……僕は代わりでいいんだ」

美緒　「ダメ」

聖　　「ダメじゃないよ！僕と一緒にいて楽しくなかった？僕は美

緒さんと一緒にいると本当に楽しかった。もし美緒さんも僕

と同じ気持ちなら……僕はそれが一番嬉しい。だからその為

なら、いくらでも僕に真さんを重ねてくれていいから。だか

らサヨナラなんて……」

美緒　「ごめん……ごめんね聖君」

　　美緒が走り去る。

美緒Ｍ「最後に見た聖君の顔には涙が浮かんでいた。これ以上彼と

いたら私まで涙がとまらなくなる。辛くて辛くてきっと立っ

てすらいられなくなる。そう思ったから私は逃げるように走

り去った。駅前の喧騒とジングルベルが耳に届きはじめる頃、

私の肌を冷たい水が何滴も刺し始めた」

○駅前

辺りにはクリスマスらしい喧騒が聴こえる。雨が降っている。

美緒　「雨……聖君傘持って……」

美緒Ｍ「ダメだ。まだ彼のことを考えている。全てを忘れなければ

いけない。そう思い携帯電話から彼の番号を消去しようとす

る。しかし走り続けた疲れと冷たい雨が体を冷やしたせいな

のか、上手く操作が出来ない」

美緒　「もう、なんで……指が……え！？」

美緒Ｍ「間違って開いてしまった電話帳。それは１２年前から変わ

らず保存している彼の……真君の電話番号だった」

美緒　「何やってるんだろう私……もう繋がらない電話番号なのに

いつまでも……」

美緒Ｍ「岩浪真……その名前をじっと見つめているとふと妙な違和

感を感じた。真君……真……そうだどうして気づかなかった

んだろう……その違和感の原因は……」

美緒　「聖君……最後に私に真さんの代わりになるって……でも私、

真君の名前なんて一度も出さなかった。なのに……」

　　駆けだす美緒。

美緒Ｍ「私は……再びあの公園に向かって走り始めていた。降りし

きる雨がいつしか雪になっているのを肌で感じながら」

○公園のベンチ

聖がベンチに腰掛けてスケッチをしている。

そこに美緒が駆けてやってくる。

美緒　「はぁ、はぁ、はぁ」

聖　　「美緒さん……どうしたの一体？」

美緒　「聖君こそ……なんでまだここに」

聖　　「待ってた……美緒さんのこと」

美緒　「どうしてそんな……」

聖　　「高校時代の美緒さんの真似」

美緒　「馬鹿……風邪ひくよ」

聖　　「でもさ、やっぱり待った甲斐があったなって思うんだ。こ

うしてまた美緒さんに逢えたし……それに二人でこんな綺麗

な桜を見ることも出来たし」

美緒　「桜……」

聖　　「ほら、見てよ」

美緒Ｍ「聖君が指さす方向を見る。そこにはあの桜の樹。柔らかな

新雪が枝のあちらこちらにフワリと積もっていてまるで……」

聖　　「真っ白な花が咲いているみたい……でしょ？」

美緒　「本当」

聖　　「昔住んでた家に大きな桜の樹があったんだ。とっても綺麗

な花を咲かせる樹でね、僕はその樹が大好きだった」

美緒　「聖君？」

聖　　「でも、ある日を境に僕らはその家を離れなくちゃいけなく

なった。僕のせいで」

美緒　「ねぇ、聖君？」

聖　　「またあんな綺麗な桜の花が見たい。僕がそう駄々をこねて

いたら、ある朝枕元に桜の絵が飾ってあったんだ。そう、僕

の為に兄さんが描いてくれた絵が」

美緒　「兄さんって……やっぱり……やっぱり聖君」

聖　　「うん。あの日初めて美緒さんに会った時ね、僕もとっても

驚いたんだよ。入院しているときにずっと兄さんが話してく

れていた女の子にそっくりな人が目の前にいるって」

美緒　「女の子って……私２９だよ」

聖　　「同じだよ。兄さんが見せてくれた写真と変わらない」

美緒　「聖君……」

聖　　「真兄さんのことずっと黙っててごめんなさい」

美緒　「聞いていい？でも真君と聖君じゃ苗字が……」

聖　　「両親が離婚したんだ。それも僕のせい。この街の病院で手

に負えないって分かった後で、家がゴタゴタしちゃってね。

結局別れて父さんだけがこの街に残った。母さんと兄さんは

僕の入院費を捻出する為に一生懸命働いてくれて」

美緒　「真君も？」

聖　　「そう。美大行くのも諦めて働きに出てくれて……」

美緒　「教えて。真君は今どこで何してるの」

聖　　「ごめんなさい」

美緒　「どういうこと……それ」

聖　　「僕のせいなんだ。幾つも仕事掛け持ちしてくれてたから…

…疲れがたたって……仕事中に事故を起こして……」

美緒　「……嘘」

聖　　「ごめんなさい。本当にごめんなさい。美緒さんから兄さん

を奪ったのは僕なんだよ。それだけじゃない。僕は兄さんか

ら夢を奪った命を奪った……美緒さんを奪った。だから……

僕は少しでも兄さんの想いを遂げたいって、兄さんのお陰で

退院出来たから。だから兄さんの為に、兄さんの代わりにな

ることを望んでずっと生きてきたんだ」

美緒　「真君の代わり？」

聖　　「うん。ずっとそう思ってきた。今日までずっと。でもね…

…ごめんなさい。今は少しだけ違うんだ。最初は兄さんの言

う通り素敵な人だなって、兄さんの想いをなぞるようにそう

思っていたけれど、でも今は僕自身が思ってるんだ、誰より

もずっと、その……美緒さんのことを……」

美緒　「……馬鹿」

聖　　「ごめんなさい」

美緒　「違う」

聖　　「え？」

美緒　「そこは違う。真君は馬鹿って言われて謝ったりしない」

聖　　「じゃぁどうすれば……」

美緒　「どうもしなくていい。聖君は聖君のままでいいの。だって

……おかしいよね。二人は全然違うんだって分かってるのに

さ……どうしてだろう、私、聖君のこと……｣

聖　　「美緒さん？｣

美緒　「ねぇ、スケッチ。早く描いてよ」

聖　　「スケッチを？」

美緒　「そう。真君は結局私に桜の絵をくれなかった。だから聖君

がプレゼントして、桜の絵」

聖　　「この桜？」

美緒　「そう、今日こうして二人で見たこの白い桜の絵。それを私

にちょうだい」

聖　　「クリスマスプレゼント……なのかな」

美緒　「そうだね。そうかもしれない」

美緒Ｍ「スケッチブックに鉛筆を走らせる彼。先程まで舞い降りて

いた白い雪はいつのまにか姿を消していた」

聖　　「やんじゃったね。……あ」

美緒Ｍ「彼が気づくのと同時に雲間から美しい陽光が降り注ぐ。そ

の光は白い桜の花をさらに輝かせる。私が今までにみたこと

のない程に美しく煌びやかに」

美緒　「綺麗……」

聖　　「忘れないようにしないと。溶ける前に、これ全部スケッチ

するから」

美緒　「うん」

美緒Ｍ「一心不乱にスケッチを続ける彼。それをみつめていてふと

私は気が付いた。何故だか彼といると笑顔がこぼれてしまう

んだって」

　　微笑む美緒。微笑み返す聖。

　　　　　【終】

※ご利用上の注意※

・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。

・ご利用に当たっての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。

・本脚本をご利用頂く際は必ず作者（gumba1227@hotmail.com）までご一報頂けますようお願い致します。

・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。

・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

　※連絡不要の場合

　　・仲間内で集まっての練習でのご利用。

　　・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

　※連絡が必要となる場合

　　・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

　その他ご不明な点ございましたらお気兼ねなく下記までご連絡下さい。

　gumba1227@hotmail.com（岩本）